

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第 56 集 (2023年度) 2023年 7月発行 : 115-127

カナダの大学におけるオンライン講義の実践

—受講者の立場からの観察と分析—

関 口 礼 子

カナダの大学におけるオンライン講義の実践

—受講者の立場からの観察と分析—

関 口 礼 子*

はじめに

本稿は、2020年12月20日10時～12時30分に開かれたカナダ教育学会の研究会で行った発表をまとめたものである。部会は、新しく導入されたオンライン授業についてであり、教員の立場からの発表と並んで、筆者は、受講者の立場からの経験とその分析を報告した。教員の立場からその経験を報告したのは、カナダのブロック大学（Brook University）で教鞭をとっている成島美弥氏で、「カナダのブロック大学での実践」と題してあった。受講者の立場から経験を報告した本報告は、カナダのビクトリア大学（University of Victoria）の事例である。

1. 観察対象の授業

ビクトリア大学のこの授業は、大学の正規の学生の授業ではない。というのは、入学に際して、いわゆる大学入学資格を求められないからである。また、最終試験は課せられない。いわば、公開講座のようなものである。大学の正規課程としての単位の認定は行われませんが、修了証書（Certificate）は出る。Uni101（人文科学）、Uni102（社会科学）に続いて、それらの修了がここに報告するUni201への出席許可の条件となる。Uni101、Uni102は、別稿をご覧いただきたい（Sekiguchi, 2016; 関口, 2020）。筆者が、Uni201のオンライン版に出席するようになったのは、次のような事情による。筆者は、2018年まで、受講者としてUni201に出席していた。Uni101とUni102は、一度しか出席が許されないが、Uni201は、もうその上がないということで、修了証書を受領した後も、希望すれば何度でも出席できる。筆者は、2019年の夏でもって、カナダをすっかり引き上げたので、大学の授業聴講もすっかり終わりにするつもりであったのであるが、しかし、2019/20年の案内が来、しかも、その年はコロナ禍騒ぎのためオンラインであるということなので、日本での現役時代、オンライン授業の実験を進めてきたという事情もあって、興味を持って申し込んだのである。本稿は、参与観察という社会学の伝統的研究方法を用いたことになる。参与観察は通常特定の地域に住民と一緒に住み生活しながら観察するのであるが、本稿は、日本にいながらのカナダの大学の授業にオンラインで参加するという地域を超えて「参与」し観察をしたものである。という事で、本稿は、大学の授業を扱ってはいるが、主たる観察の対象は、授業の内容そのものではなくて、コロナ禍騒ぎで導入された、新しい授業の方法である。

*日本の社会研究所代表

このような事情であるので、偶然であるが、カナダの教室での対面授業とオンラインの授業の両方の授業のやり方も比較できることにもなった。しかし、Uni201の授業のカリキュラムは毎年変わるので、授業内容も、講師も同じではない。

2. 方法と視点

授業 Uni201の特徴をもう一度まとめてみると、

- ・内容は最新の研究成果のかみ砕いた伝達である
- ・受講に、大学と同等の入学資格を求められない
- ・しかし Uni101, Uni102の修了者のみが出席できる
- ・最終試験は無い
- ・修了証書が出るが、この修了証書は、正規の大学卒業資格（Diploma）としては通用しないし、大学卒業資格の一部も構成しない

という特殊な授業である。内容は毎年変わり、何度でも出席できる。対面授業の時は、毎年、40人ぐらい出席していた。

筆者の教育研究の方法であるが、社会学的方法の訓練を受けているので、どうあるべきかという視点でなく、重点は、実態はどうなっているかという分析である。そこから、副次的に、何が問題か、どうあったらよいか、ということが結果的に出てくることもあるかもしれないが、それが、目的ではない。今回の報告の中心視点は、①どのような方法で行われたか、②その方法は、対面授業の時と比較してどう異なるか、である。

3. 観察の対象

(1) 2020年度の Uni201と授業内容

筆者の経験した授業内容は、以下のとおりであった。

表1. 観察の対象となった授業

スケジュール	テーマ	講師または指導者	助手
2020年 9月	ウイルス医学	Ed Ishiguro	Me (及び Ba)
10月	生物学：樹木	P. Aderkas	Me (及び Ba)
11月	政治学：アメリカの選挙制度とビクトリアの選挙	J. Aragon	Ba
12月	マリファナ等覚せい剤：経済学からの分析	C. Willmore	Ba
2021年 1月以降	(クラブ) 心理学：ストレスからの解放	テッド (Ted) (ビデオの制作者名) の話	Cr
2020年8月	(クラブ) 写真部	Ni (リーダー)	

二重線の下はクラブである。授業のない期間、夏など、正規の授業とは別に、クラブが組織される。長い休みの期間、受講者たちが大学から離れてしまわないように設けられている。筆者も帰国直前の2019年夏、対面で折り紙のクラブを担当していた。大学は、部屋の確保と予約やコンピュータなど機械の使用、折り紙の提供を行ってくれたが、それ以外の援助も監督もなく、内容は担当者任せであった。正規の授業と比較して、授業がオンラインになった時、このクラブが正規の授業と比してどのような状況になったかは参考になるので、表1の二重線の下に掲げておいた。その他の明記してある講師の名前は、公式のシラバスに載っている表記である。助手の名はシラバスに載らない。しかし、今回の場合非常に重要な役割を果たしていると見たので、識別のため掲げておく。ただし、この名前は、筆者がたまたま対面授業の時代から出席していたから名前をファーストネームで知っていたので、オンラインになってからは、知らされていなかった。カナダの大学では、通常、教授も含めてファーストネームで呼び合う。記しているのは、通常呼んでいるファーストネームの最初の2文字である。

(2) 授業に用いられた道具立て

この一連の授業に用いられた道具立ては Zoom であった。

(3) スケジュール

授業の時間割は毎週火曜日午後4時から5時30分であった。以上はカナダ時間である。日本時間にする、水曜日、午前8時から、9時30分（途中でカナダでは夏時間が終わったので、9時から10時30分になった）。これは、午後4時から4時30分までの助手によるウォーミングアップと4時30分から5時30分までの講師による講義の二つに分けられた。このスケジュールは教室での対面授業の場合も、オンラインになってからも変わっていない。変わったのは、受講者の筆者がカナダから日本に移動してしまったので、そのための時間の違いである。

4. 受講した授業の内容と方法

経験した4つの授業の概略を説明するが、内容の紹介は本節の目的ではない。方法を叙述するための材料である。

(1) Covid-19に関する授業

講師は ishiguro という年配の講師であった。この講師は、筆者をはじめでであったが、前にも数回講義録に載っていたベテランである。イントロダクションとして、東南アジアの都市の最近のビデオが映された。感染ルートの説明をするなど授業の内容は、エボラ出血熱を例にとつての細菌学の説明であった。授業の依頼が Covid-19なので、自分の知っている知識あるいは持っている資料を用いて、依頼になるべく近づけようとしているという感じであった。授業の方法は、ビデオを流したり、図やグラフをたくさん用いたりしていた。受講者との対話もなるべく用いていた。エボラ出

血熱の世界分布図を見せて、どのような広がりかを受講者に考えさせるなど（正解は、赤道沿い。受講者からの反応は、アフリカだとか、東南アジアの1国をあげるとか、図の読み方はかなり偏見に満ちたものであることが示されていた）、さらに、感染のメカニズムを、エボラ出血熱の細菌のメカニズムを例にとって説明した。方法については、「自分は80歳を超えている」という講師は教室で示すような図をスクリーンの中で示しながら説明、または質問をした。その都度、また、学生の返事の都度、発言学生の顔を大写しにするように、画面は適切に切り替えられていた。動画は最初の東南アジアの町の風景以外、なかったように思える。受講者との対話はかなり用いられた。

(2) 「樹木」に関する講義

講師の自宅から配信されていた。スクリーンに授業の様子が映し出された。窓を後ろにする逆光であったので、見づらいことも多かった。この教師の特徴は、受講者との対話を重視していた。たとえば、最初のイントロダクションとして、「印象深い木について述べよ」と一人一人に尋ねた。こうした場面も、発言者の顔が大写しされた。筆者は、「子どもが小さい時、トロントにいたが、メイプルの落ち葉の美しさとその量について驚かされた。子どもが落ち葉の下にもぐって遊んだりするが、車が、気が付かずに轢いてしまったりするから気をつけろ、と注意された」と言う。講師は、「自分も、子どもの頃、同じことをやった」と返してくれた。その都度画面は発言者に切り替えられた。この講師は、その他にも、毎時間何か受講者全員に質問をした。受講者たちは、もちろんオンラインで答えて、発言者の顔が大写しにされた。講師自身の説明もオンラインで行われた。ビデオの時もあるし、図面のこともあるし、実際の、写真のこともあるし、自分の頭ほどの木の実などを持ってきて、自分と共に示したこともあった。ビクトリアの興味深い樹木について、写真を示してくれた。そのほかに、長寿の木について、写真を掲げてくれた。最後の日には、その前回の授業の時に受講者全員に何か質問を出させ、それに答えるというのをテーマにした。筆者は、木は、人間より長生きをする、きちんと政策的に育てたり、伐採したりしないと、後の人間の生活に大いに影響する、ビクトリアには、森林政策があるか、という質問をしてあった。

この年配の講師も、「自分は、オンラインの授業に慣れていないので」と何度も言っていた。しかし筆者は、結果的にはスムーズで、なかなか卓越した授業だと見た。

(3) 政治に関する授業

上記2人より若い講師であった。講師はアメリカ人であった。一方的にしゃべることが多かった。講義する講師の画面の背景は、家族だろうか、子どもの顔を不規則に並べたバーチャルな絵であった。背景は、講義者のITの力量が表れていると思われるので、掲げておく。内容は、ちょうど行われていたアメリカ大統領の選挙制度についての説明とこの講義の頃ちょうど行われたカナダのビクトリア州の選挙制度の説明であった。受講者をいくつかの小グループに分けて、グループ内でディスカッションをさせ、その結果をまとめて報告させた。また、自分のほかにもう一人ゲストスピーカーというべきか人を連れてきて、彼女にも、かなりしゃべらせた。カナダの授業では、人を呼んできて「資料」として用いるのに、よく出会う。

(4) マリファナに関する授業

マリファナについて、その他の覚せい剤についての歴史等の説明であった。また、経済学からの分析が示され、その見解などであった。丘から街を見下ろすバーチャルな背景の中で、マリファナやアヘン、その他の鎮静剤などについての経済学的分析と歴史、見解の紹介であった。非合法とするから、それを得る値段が上がり上がって、それを扱う非合法グループの金儲けの手段になる、といった見解を講義した。カナダでは、マリファナは2018年から合法化された。対面授業の時のクラスメートのなかに、休憩時間になると姿を消す受講者がいた。その人物は、日本についても、かなり親密感を持っていたので、筆者もよく話をした。姿を消すのは、たぶんたばこでも吸いに行くのだろうと思っていたが、ある時、それはマリファナを吸うためであることを知った。常にある入れ物を持っており、食事の時など、テーブルの上に載せていた。ある時、食事の後で、「それは何だ」と問うと、嗅いでみるかといきなり差し出されたという経験がある。匂いも何もしなかった。

(5) 対面授業と比較して

このように内容は、時局のものを集めていた。たぶんこの講師達を集めるのは、主催者側は、大変な労力であったろう。4人の講師についてそれぞれ週1回ずつ4回の授業を経験した。方法から見ると、前半二つの講義は、受講者に毎回発言の機会が割り当てるディスカッションの多い講義方式であった。授業は黙って聞くということに慣れていて筆者には、きつかった。しかし、楽しかった。毎回、受講者のレベルに合わせて、理解できるように、関心を持てるように構成し直されていた。いかにも教室での対面の講義をし慣れたベテランの講義という感じであった。後半二つは、総体的に若い講師であった。一方的講演口調で、多分前もって録画されていたものであろう。面白くなかった。授業を聴いているというより、論文を読んでいるのを聴くような感じがした。3番目の授業は生の講義であったが、4番目のは、多分録画してあったものであろう。この4人とも、筆者は初めてであった。しかし、前2人は、いつも教室でやり慣れているといった感じである。後の2人は、一生懸命であった。普段教室では話し慣れていないのではないかといった具合であった。要するに、日ごろの対面授業の時の講義の状況と経験、力量が講義に表れているといった感じである。

5. 受講参加者と参加の方法

これらの講義の参加者は、およそ19人であった。対面授業のときは、常時40人ぐらいが教室にいたので、大幅に減少している。オンラインになってからは、Zoom画面の窓に、参加者の顔が映るので、窓の数を数えたものである。毎回数えたわけではないが、数えた時は、3回とも19人であった。

参加の方法は、毎週メールで入ってくる案内では、①「Zoomをダウンロードして、ミーティングIDとパスワードを入力する」、「コンピュータ、ラップトップ、タブレット、スマートフォンのどれかでZoomのウェブサイトを使って参加してください」と道具立てには毎回メールで丁寧に案内があった。その他に、②「電話だけでも参加できます」と説明され、二つの電話番号が記されて

いた。

コンピュータ画面の受講者には、名前と顔が示され、電話だけの参加者は、その人の顔写真の画面は真っ黒であった。電話接続の人は、はじめの頃は参加していたものの、次第に参加しなくなってしまった。コンピュータによる Zoom での参加者については、顔のほかに、背景が映る。バーチャルな背景を使っていたひともいるがたいは、室内と顔の映るモードを用いていた。そうすると、室内の様子なども映る。家具調度や、時には同居のパートナーが後ろを横切ったり、猫が映ったりもした。また、受講者本人もコーヒーのマグカップを持ってきて飲みながら聞いていたり、ベッドに横になって聞いていたりもあった。カナダの社会生活に関心のある社会学出身の筆者にとっては興味深かったし、級友たちに親しみがわいた。逆に筆者も、部屋干ししてある洗濯物が映ったりしないように、気をつけなくてはならないことを知った。少数者はバーチャルな背景を使っていたが、筆者のコンピュータでは、バーチャルな背景は、どうもうまく映らなかった。バーチャルな背景を映すには、筆者のコンピュータは容量が小さすぎたのかもしれない。また、明かりの具合も、昼と夜では異なるので、うまく映すには、考慮しなくてはならないことを知った。別の室内照明があればこの問題は解決するであろう。

6. 助手の役割

この学期は、電話を通じての利用者が脱落してしまうなどの問題が起こったが、一応予定された授業が大変スムーズに行われた。しかし、その蔭には多大な犠牲も払われているらしいことがわかった。それで、助手の果たしていた役割を取り上げてみたい。先の一覧表に助手まで名前を出したのはそのためである。対面授業のときは、授業の前30分、ウォーミングアップの時間が設けられていた。対面授業のときには、隣室にコーヒーとおつまみ程度のものが提供されており、そこで早く着いた者たちが、雑談をしたり、空腹をやわらげたりしていた。それから、教室に移動して、助手による授業へのウォーミングアップの時間が設けられていた。

(1) Me のウォーミングアップ授業

Me のウォーミングアップ授業は、次のように行われた。対面授業のときは、その日の授業の予定されたトピックについて受講者に質問を出させる。そして、箇条書きにしてまとめる。授業者に渡すことが期待されたが、講師は自分の時間になって教室に入ってきて、すぐ講義をはじめるので、それを見る機会はなかったであろう。講師は、受講者が何に関心を持っていたかを知る事には役だっていたのであろうが、直接質問に答えるということにはなかった。これは、講師に、というより、受講者のそのテーマに対する心の準備ということであったろう。

彼女の本業は、教師である。大学の博士課程に属しながら、この授業の助手をしていた。そして、これは、カナダの教授法のひとつのインクワイアリー・メソッド (inquiry method) と呼ぶ方法である。特にエッセイを書く前にテーマの整理として、用いられる。これは彼女の対面授業の時の手法であるが、オンラインになってからも、同じ方法で、その日の授業テーマについて、質

問を寄せるように求められた。それは、Zoomを通じて集められ、その場で整理されて、皆に提供された。Zoomになってからは、しかしながら、次に来る授業の内容に限定されることなく、特に、オンラインでの受講に関するテクニカルな質問と指導が増した。Zoomの使い方について、不慣れた受講者たちはずいぶん質問を持っていたからである。彼女自身のコンピュータの背景画面は、バーチャルな絵が用いられていた。

(2) Baのウォーミングアップ授業

11月から、ウォーミングアップの時間はBaいう女性に変わった。彼女も、同じく大学院在籍の女性である。彼女は、次の授業のテーマへの導入でなく、Zoomへの技術的質疑等に時間を費やした。また、「毎日どうしている?」といった日常的な会話が主であった。また、受講者たちに、自分が今何に興味を持ち、何をしているかといったことを言わせることに終始した。困ったことはないかという質問が投げかけられた。すなわち、この時間は、教室での授業以外の自由な会話といった感じであった。それを彼女が司会・進行するという感じであった。この時間については、「ヴァーチャルコーヒールーム (Virtual Coffee Room)」という名がのちにつけられた。受講者が集まって、何か情報を交換するといった時間である。対面授業の時には、受講者同士で授業が始まるまで雑談を交わしていたのだが、それをオンラインで行うようになったという感じである。

要するに、このウォーミングアップの時間については、どのようにするという決まりはなく、助手が臨機応変に自分の持つ力量と知識に応じて過ごすという感じであった。先の、Meの場合は、彼女がたまたま現役の教師であったので、自分がマスターしている教授法で強く指導していたのであろうと推測される。やり方は、その助手が授業以外の生活で、どの方法をマスターしていたかが、大きく作用する。

提示する内容に応じて、提示方法のみならず、たとえば、講師や受講者を表示するか、非表示にするか、などである。助手が切り換えを手伝っていたとみられる。

(3) 蔭の力

講義によって、こちらからアクセスするIDのアドレスが頻繁に変わるのに気づいた。講師とその面倒を見る助手が変わるたびに、それらは変わった。混乱の原因にもなっていた。これらのことから、授業の配信については、助手が相当に関与しているのうかがわれた。その関与は、ウォーミングアップの時間のみでなく、授業中も授業進行の裏方として常に、助手が相当程度に関与しているのではないかと推察された。講義の内容は講師のものである。しかし、講義内容を受講者に届けるプロセスで、助手が力量を発揮していたと思われる。特にコンピュータの使用について不十分な年配の講義者の場合は、その援助は不可欠であったように思われる。例えば、講師自身の直接配信、資料の提示、質問の時間への切り替え、講師の回答の時間など、授業のスムーズな進行のための切り替えには、助手の裏からの、遠隔地からのサポートがあったと推測される。授業中の見えないサポートの外にも、毎週参加勧誘または確認のメールが入ってきていた。さらに、「接続の問題で何か技術的な問題があったら、Eメールをください。私たちはあなたが参加してくれるのを望ん

でいます！」といつも付け加えられていた。これらの呼びかけにどのようなことがどの程度持ち出されていたかわからない。

ともかくも、4人の講師による一連の授業は、それぞれ異なる方法であったが、どれも非常な成功裏に終わった、というのが、筆者の受講者として見た感想である。助手や講師は、授業が始まる前に打ち合わせの会議を対面授業の時も行っていたし、オンラインになってからも、行っていたとかがわかる。

(4) 負の状況の推測

しかし、次のことも付け加えておいた方がよいであろう。対面授業の時から長らく務めていた最初の助手 Me は、2ヶ月で助手職を去った。公式の理由は、博士論文で忙しいので、そちらに専念したいというものであった。10月から勤めていた次の助手 Ba も12月で降りた。彼女も、対面授業の時から、長らく勤めていた助手である。後者は英国人であったが、国に帰りたい、ということであった。さらに驚いたことには、その上の助手、すなわち、個別の授業時間の助手でなく、全体の授業を長らく統括していた、Ha という助手まで、退職すると伝わってきた。新しいやり方は、いかにこれらの助手たちに過酷な試練であったかを物語っているのではないだろうか。この授業は毎年同じ人によって同じものが行われるのではなくて、その都度その時の状況に合わせて、講師とテーマが決定される。誰がどのような方法で人探しをしているのかわからないが、たとえ人が探せたとしても、受講者の指導のみでなく、今度は、講師がオンラインで授業ができるように技術面の指導を助手がしなくてはならなかったであろう。そのための勉強もしなくてはならない。報酬に比して相当の負担であったろうと思われる。

研究会当日に、講義を準備する教員の立場から発表を行ったブロック大学の成島氏も、「とても準備が大変だった。自分は専任だから、仕方ない、やっているが、他の仕事ができない。バーンアウト状況である」「毎年専任教員を募集しているが、今年は、応募者が、例外的に少ない」と語っていた。ブロック大学のセンターにはずいぶん技術指導をしてもらったと述べてはいる。彼女が大変だった例として、「自分がしゃべったことを文字としてビデオに載せるにはつづりを訂正するのが大変だった」と言っていた。筆者の聴講した授業の中にはこのトランスクリプト機能（しゃべったことを同時に画面に文字で提示する機能）を使用した例はなかったと思う。

7. 受講者同士、受講者・教師とのコミュニケーション

オンライン授業について、受講者同士の接触が薄れる、という意見もあるが、筆者の経験した事例からは、講師と受講者の関係はむしろ近くなったのではないだろうかと思う。受講者同士も、むしろ近い関係になったのではないだろうか。ましてや、筆者は日本に帰国して全くビクトリアのクラスメートたちとは無縁になるはずであったが、この授業があったおかげで関係が続いている。また教室内の受講者同志も、対面授業では講義中はみな前を向いており、お互いの顔を見ることは無いが、ズームの授業では、発言者の顔も表情も大写しされる。

今のコンピュータはいろいろなことができる。オンライン授業では、講師は、自分と受講者にか合った方法を選択して、使うことが必要であろう。本稿で示した事例の場合は、助手のサポートにかかっていた。そして、成功・不成功は、助手の力量に大きくかかっていたと見ることができる。しかし、その負担の大きさが、今回は助手を過労にし、退職に導いてしまった。

クラブには大学は本質的には関与しないが、前述の程度には援助してくれるが授業そのものには全く援助をしてくれない。ここに掲げた大学が関与した授業の前後の二つのクラブは、ほとんど成立しなかった。「心理学：ストレスからの解放」は、「テッドの話」という多分市販の教材用シリーズのビデオを毎週流したのみであった。写真部は、筆者は対面の時も出席し、戸外で撮影に出たり、コンピュータセンターを使ってビデオなどを使ったりして講義をしていい授業をしてくれたが、オンラインを使うようになってからは、スケジュール表は配布されてきたが、実際には、その日にビデオすら送られてこなかった。リーダーのNiは写真の技術は優れているが、コンピュータを使ってコミュニケーションする技量と道具立ては持っていなかったと見える。

おわりに

コロナ禍により、急にそれまでの対面授業からオンライン授業に切り替えることを余儀なくされ、多大なエネルギーがコンピュータ技術の習得に費やされねばならなかった。講師側も受講者側も、それができない場合は、力量を発揮できない状況になっているのが見てとれる。

大学の教員の側も、①伝達する内容、②内容を伝達できるように組織し直す力、③経験から来る優れた教授能力、④コンピュータとネットワーク組織というハード面の設備、⑤コンピュータに内容を乗せ、かつコンピュータを操作して送り出す能力、⑥フィードバックを活用して講義を臨機応変に変える能力、が必要になる。本稿で検討対象とした授業を担当していたベテラン教員は、特に⑤の部分に欠けていたので、助手に依存せざるをえなかった。この助手たちは、専任のポストでなく、奨学金のような意味合いで授業の補助の仕事をする代わりに、若干の金銭が与えられていたと推測される。

筆者が現役時代の2000年台の初め、まだ大学が国立であった時代、急にカナダでの研修の機会が与えられたことがあった。ゼミ生が7人いて毎週集まっては、卒業研究が順調に進行していた。不在の間、ゼミ生たちは毎週集まって自分たちでゼミを続け、その様子は筆者のところにメールで送ってくれる、筆者もコメントや指導をメールで返すということで実質的にはゼミ生の指導は筆者が行い、しかし形式的には、筆者の属する講座の7人の教官に1名ずつ指導をお願いするという手はずにして出かけた。しかし、この計画はうまく行かなかった。ゼミ生たちは、初めはメールで報告してくれたが、次第にメールを送ってくれなくなってしまった。また、預けられた形式的指導教官と学生たちの間もうまくいかなかった。筆者の方法は、実証的方法である。この年は、それぞれインタビューをして、テープ起こしをしてそれをもとに考察をまとめるという方法であった。他の教員たちは、文献研究のみを研究と考える者が多かった。インタビューを終え、テープ起こしまで終わって最も進んでいた学生は、まだそれしかやっていないのかと叱責をされ、意気消沈するという

ことが起こった。今のように、Zoomの方法が開発されていたならば、物理的に距離が離れていても、即時、筆者が自分で指導もできたのであるが、当時は文字情報だけのメールがせいぜいであった。この時の学生には、気の毒なことをした。苦い経験である。現在、Zoomのようにオンラインで即刻、言葉・画像・音声を発信できるような方法が利用できるようになったのが、嬉しい。

筆者は、その後も、受講学生が教室に来られないものが多くいたとき、ゼミをオンラインで行った経験がある。まだ、コンピュータが音声や画像を扱うことが出来なかった時代のことであったが、これらは、いずれも成功であったと思っている。筆者は東京にいて、ゼミを主宰し、学生の来られるものは、教室に来て大学の施設を用いて、しかし授業時間にオンラインで参加、来るのが難しい学生は、例えば神戸から、カナダから、お子さんがいて自宅を出にくい学生は、東京近辺の自宅から授業時間にメールで参加した。一度ゼミ中に東南アジアに出張した学生が授業時間に彼の地でメールの発信を試みたけれどメールそのものを発信できなかったが、それ以外は成功であった。それらについての報告は、関口、2001、関口・中島、2001に詳細に示してある。カナダから参加した学生は、時差の関係で、夜中・早朝に当たるので、その点では大変だったらしい。しかし、いずれもそれなりに成功であった。

今回、本稿でずっと報告してきたカナダの授業受講の経験は、受講者20人足らずであった。日本で行った筆者の実践事例も受講者は最高20人であった。これが、日本でよく行われているような大教室の授業になると、方法も変わるであろう。日本の大教室方式での対面授業をできるだけそのままオンラインで実践してみた試みについては池真が報告を書いている（池真、2020）。

ここで主として報告したビクトリア大学のこの時の授業の場合、急激だったので助手がオーバーワークという犠牲になって成功させたというべきだろうか。しかし、今回の授業のオンライン化は、急であったので混乱を招いたが、準備に十分な時間があれば、新しい有効な教授方法として定着するであろうと思われる。カナダで行われたUni201のその後の授業もオンラインで続いているので、筆者も続けて参加している。コンピュータの持つ機能を全部使う必要はない。内容と素材にあった方法と、教員、受講者の持つ技能に合わせて、選べばよい。教室での対面授業でも教員によってその具体的な授業展開の方法は異なる。選択肢が広がったことを喜ぶたい。

【引用文献】

池真真朗（2020）「新型コロナ禍の中での遠隔大教室双方向授業」『書齋の窓』No. 672，2020年11月号，24-30頁。

関口礼子（2001）「同期型オンライン授業の実践とその評価：2000年後期授業での試み」『情報社会試論』Vol.7，41-60頁。

関口礼子（2020）『カナダの大学公開：ビクトリア大学（BC州）の事例』日本の社会研究所。

関口礼子・中島透（2001）「オンライン授業を成功に導くための条件：大学院サテライト教室での同期型授業の実験」『大学論集』第32集，197-213頁。

Sekiguchi, R. (2016). Uni101: From the Eye of a Student in the Light of Economics. *Divergent/Convergent*:

Journal of the University 101 Program, UNI101: Celebrating Ten Years of Making Change, Tenth Anniversary Edition, Spring 2016, 174-179.

(注：この論文を印刷に付したとき、筆者の提出したタイトルは、Uni101: と始めに授業名がついていたのであるが、冊子全体が、Uni101についてであったからであろうか、印刷されたものにはタイトルから、その部分が欠落してしまっている。)